9980

四一

保存期限	決裁指定	決行指定

政務次官 参與官 回付 決裁 前連帶 後課名

受番 領受號 陸軍省 貳第三四三號

件名 出版物送付ノ件

起元應(課)名 調査部

決行(決裁)後 回覽課名 印刷課

大臣 委

政務次官

参與官

書記官

審案 筆記者

次官 委

高級副官 委

主務副官 官房御用掛 主計

主務局長

主務課長

主務課員

主務局課				大臣官房	
番號	受領	提出	受領	了結
	昭和 年 月 日	昭和九年二月二十日	昭和 年 月 日	昭和 年 三月 日

連帶	決行(決裁)後回覽
局長	局長
課長	課長

乙書

拾年保

アジア歴史資料センター

本省ヨリ内務省ヘ送付案

一、思想戰

右陸軍省調査部ニ於テ發行ニ付出版法第四條ニ依リ

製本　貳部送付ス

陸普第九五七號　昭和九年貳月廿壹日

アジア歴史資料センター

8980

思想戰

昭和九年二月十一日
陸軍省軍事調査部

アジア歴史資料センター

6980

目次

近代國防戰爭の特質と思想戰……一頁
世界大戰に現はれた思想戰……四
大戰に於ける思想戰の手段……六
スパイ戰……一〇
大戰後日本に對する列强の思想戰……一一
壽府の論戰に現はれた國際思想戰……一六
最近に於ける日本に對する思想戰……一八
思想戰に對する國民の用意……二一

アジア歴史資料センター

0480

思想戰

近代國防戰爭の特質と思想戰

過去の戰爭に於ても、思想、政略、經濟等が戰爭遂行の重要なる要素であつた。孫子も開卷第一に「兵は國の大事、死生の地、存亡の道なり、察せざるべからざる也」と言ひ「故に之を經するに五事を以てし、之を校するに計を以てして其の情を索む」と述べ、而して「一に曰はく道」と斷案を下して居る。即ち道とは、國を治め兵を計るに道を以てし、上下一心、擧國一體、危さを畏れざらしむるを謂ふのであつて、是れ國民の思想統制の根本たるもの、依つて以て自らを守り、依つて以て敵を破るの第一歩である。又、孫子は特に謀攻の篇を設け、「戰はずして人の兵を屈する」を「善の善なるもの」と爲し而して「上兵は謀を伐ち、其の次は交を伐つ」と敎へて居る。交とは敵の與國を指す。是れ今日の所謂思想、政略戰をも含むものと解釋してよろしい。

アジア歴史資料センター

然しながら過去の國防戰爭に於ける思想、政略、經濟等は概ね只、武力戰遂行の助成的要素の如く考へられて居つたのであつて、謂はゞ武力戰の附隨的手段乃至は又、武力戰の後詰と見られたに過ぎなかつた。然るに今日の國防戰爭に於ては、武力戰と、思想戰、經濟戰等が、殆んど對等の形に於て實現することゝなつて來た。否寧ろ國防戰爭の根本は思想戰、經濟戰に存することを自覺しなければならぬ時代となつて來たのである。

從つて武力、經濟、思想政略等各種作戰手段を、一元的に統制する國家が、近代戰爭の勝利者たることが出來る。而も之等の作戰各手段は、平戰兩時を通じて、統一したる一定の方針に基き、一貫せる指導方策に則り、之を遂行貫徹せなければならぬ。

故に近代戰爭に於ては、平時と戰時との間に、劃然たる時期の區別がなく、宣戰布告は將來戰には必ずしも出現しない。將來戰に宣戰布告のないことは、日本に駐在した米國海軍武官デヴイス大佐も、嘗て其の著「日本怖るべし」に於て述べた所である。

アジア歴史資料センター

08772

「戰爭は政略の繼續である」とは、有名なる獨逸クラウゼヴイツツ將軍の名言であるが、近代戰爭に於ては、戰爭の範圍が更に擴大し、「國家間生存競爭の白熱化に伴ふ國家國民の生活夫れ自體が戰爭となつて來た」。從つて風雲急なる時期より武力戰爭開始前後に亙り、政略、思想、經濟竝に武力戰爭行爲が、互に相錯綜して大規模に展開し、遂に全國力を擧げて乾坤一擲の大戰爭となるものと思はなければならぬ。

例へば滿洲事變の經過が我等に暗示する如く、武力作戰行動が、滿洲及上海に於て進展して居る間に、ゼネバ及び列强の主都に於ては、猛烈なる政略戰が演出せられ、之と併行して、經濟封鎖戰がスチムソンに依つて提唱せられ、將に實現せんとする勢を見せて來た。幸にも急速なる經濟封鎖戰は實現に至らなかつたが、近代戰に、武力、思想政略、經濟の三作戰部門があることは、滿洲事變が吾人に明確に警告したところである。

所謂思想戰とは、上述のやうな廣汎な意味に於て、武力戰爭と相應じ、又は武力戰をも誘導する所の、大規模にして根本的なるものであつて、近代國防戰爭上見逃すべから

アジア歴史資料センター

ざる主要素である。以下右基本觀念の下に、聊か思想戰なるものを概觀して見ることにする。

世界大戰に現はれた思想戰

世界大戰に於ては、相當大規模な工作を以て、所謂プロパガンダ(宣傳)の名に於て、近代的一戰爭手段たる思想戰が出現した。此のプロパガンダ戰線の勇將は、英國のノースクリッフ卿、獨逸ルーデンドルフ將軍、米國に於ては大統領ウイルソン自らであつた。戰爭の中期より末期にかけて、恐るべきプロパガンダ戰の力は、敵國戰線の後方は固より、其の國內の主要都市、國民の臺所に迄猛威を揮つて、遂に獨逸側は、この威力の前に崩壞するに至つた。其れが武力戰及び經濟封鎖戰と相關聯して行はれたことは勿論であるが、プロパガンダ戰其れ自體として、獨自の立場に立つて、活力を發揮したことは見逃すべからざることである。

英國　は世界大戰勃發直後、一九一四年八月、平時からあつた宣傳事業を擴張して新

08773

アジア歴史資料センター

08744

聞局を設置し、一九一七年一月には別に情報局が設けられ、宣傳事業を一括して活動を開始するに至つた。次でノースクリッフ卿外三名を以て成る顧問委員が組織せられ、ノースクリッフは自ら宣傳及政略關係の使命を帶びて米國に渡り、大いに活動するところがあつたが、一九一八年の二月に至り、情報省が設置せられ、ヒーバーブルック氏が情報大臣の椅子を占め、ノースクリッフ卿は敵國宣傳部長の職に就いた。其後曲折を經て、ノースクリッフ卿が宣傳政策委員會の全指導を行ふことになつた。

米國　は一九一七年四月世界大戰に參加後、大統領ウィルソンにより公報委員會を組織した。この組織は、國務長官、陸軍大臣、海軍大臣並にジョージ・クリール氏を以て編成せられ、クリールが右公報委員會の議長となつて、對内、對外宣傳事業の一切を統括した。

佛國　では外務、陸軍、海軍の各省が夫々宣傳機關を持つて、互に協調しつゝ宣傳を

アジア歴史資料センター

實施した。

獨逸側に在つては、大戰間の宣傳は最初、不統制のまゝ一の宣傳用機關紙を利用するに過ぎなかつたが、軍事當局と、各省間に幾多の抗爭曲折が繰り返された後、ルーデンドルフの提唱に依り、一九一八年八月に至つて、漸く宣傳組織を設置することが出來たけれども、時既に遲く、聯合國側の猛烈なる宣傳に依り、遂に一敗地に塗るの止むなきに立ち至つた。

大戰に於ける思想戰の手段

世界大戰に於て、各國の採つた思想戰の手段は、所謂宣傳と稱するものであつて、其の方法は、新聞其他の言論機關の利用、ビラの撒布、電報の利用、ポスター、活動寫眞の利用、其他情報の發表、人と〳〵の接觸に依る對話、演說、示威運動等誠に廣汎であるが、之を大別して、敵國に對する宣傳、中立國に對する宣傳、自國民に對する宣戰の三つに別けることが出來る。

08975

アジア歴史資料センター

08976

一、敵國に對する宣傳は、敵國軍の志氣を阻喪し、之を潰亂に陷入れ、又は敵軍の指揮を攪亂し、其の作戰を誤らしむる等、直接敵軍に對するものと、進んで敵國民の意氣を挫き、其の戰爭意思を崩壞し、敵國組織を混亂破壞し、之を革命に導く等、敵國民に對するものとの二つがあつた。

二　中立國に對する宣傳は、敵國に對して惡感情を起さしめ、自國に對して好感を持たしめ、成し得れば、中立國を味方として戰爭の渦中に引き入れ、然らざるも我れに有利なる好意的中立國たらしむる如く實施せられた。

三　自國民に對する宣傳は、敵國に對して義憤を感せしめ、戰爭意思を强調し、勝利に對する確信を强からしめ、以て擧國一致の戰爭を遂行貫徹するを主なる目的として實施した。

玆に其の具體的方法を列擧することを避くるが、一二の例を擧ぐれば、米國は戰爭參加の爲め、獨逸帝國主義打倒を目標とし、民主々義を指導精神として、大々的に國民の

アジア歴史資料センター

志氣を結束し、遂に參戰を見て、四百萬の大軍を急編成するまでに立ち至つた。之が爲めジョージ・クリールは各種の手段を盡して、大量宣傳を實施した。活動寫眞、展覽會、其他印刷物等の爲めに費した經費は、二十八億二千五百萬ドルと稱せられてをる。獨逸ハンス・テインメ氏は其の著「兵器に依らざる世界大戰」に於て、此の情況を述べて曰く「クリールはアメリカ及世界から、戰爭を最善の效果を持つて恰も商品の如く購ひ取つた」と云つて居る。

敵國を攪亂する爲め、列國の採つた宣傳は、まことに至れり盡せりであるが、中でも獨逸が、かの有名なる「封印列車」を仕立て、レーニン及び其の黨員數十名を入露せしめて、遂にロシヤを革命に導いたことは世人周知のことである。かくしてロシヤを覆へした獨逸も、ウイルソンがアメリカの白堊館から涙ぐましい人類愛の撒文を送つて、窮乏懷疑のどん底に在る同盟國(ドイツ、オーストリヤ)側人心の奥底に呼びかけたところの深刻な大宣傳に依つて、遂に其の戰爭意志を挫折せられ、再び立つ能はざる敗北を見る

アジア歴史資料センター

8480

に至つた。ウイルソンが、國際聯盟を提唱するに至つたのも、宣傳の必要の爲め戰爭間、聯合側で豫め設定したところの、宣傳指導根本方針の具體的實現に外ならなかつた。言はゞ、ウソより誠が出たのである。彼が其の自國民に對しては「打てや懲らせや獨逸の主義を」との標語を以て、國民を戰爭に驅りたて、自ら議會に大統領の戰時獨裁權を確立じながら、他方敵國に對しては、かゝる國際平和的金看板を以て敵國の民心を收攬し、其の戰爭意思を破壞し去つたことは、聯合側宣傳の王將として誠に敬服に値する。

之に反して獨逸側は、其の宣傳の大本を軍統帥部に於て掌握し、軍國主義の許に鐵の如く國民を結束し、戰爭の勝利を確信させて、戰爭末期まで引きづつて來たが、ロシヤ崩壞後東部戰線より西方戰場に移動した兵員は、獨逸が、ロシヤ崩壞に利用したところの社會民主主義思想を持ち歸つて來て、自らの軍隊の結束を弱くし、之と相應じ聯合國側の宣傳攻擊により、遂に戰勝の確信を失ひ　一九一八年末期に於ける戰線の大崩壞を

アジア歴史資料センター

64.80

見るに立ち至つた。

敵國内に宣傳する爲めには、飛行機、小型氣球、ゴム風船等により、ビラを撒布したり、中立國の通信や言論機關を利用したのであるが、また自國大新聞の威力は、見逃すべからざる偉大なる役割を演じた。カイゼルが「我れに倫敦タイムスなし」と慨嘆したことは、この間の消息を物語るものであらう。

スパイ戰

大戰間思想攻擊と相應じて列國が周密なる情報網を持つて、敵國をスパイしたことは、世人の記憶に新たなる所である。獨逸の情報網は主として軍部機關に依つて構成せられてゐつた爲め、開戰後間もなく敵國の爲めに妨害を蒙つて、情報の蒐集が思はしく行かなかつたのに反して、英米側に於ては、情報網は主として經濟機關に張られてゐつた爲め、敵國の妨害を受くることもなく開戰後、日を經るに隨つて情報は益〻適確となつた。

敵國に活動したスパイが血の躍るやうな活動をしたことは、映畫や、小說や、手記等

アジア歴史資料センター

0880

に依つて世間に吹聽せられてをるが之等のスパイから本國に遞送した通信の手段等まことに至れり盡せりで、列國の戰爭記念館を覗いて見ると、涙ぐましい記念の數々が陳列されてある。

スパイ活躍の一適例として獨逸人ジルバー氏を擧げることが出來る。氏が氏の著「他の兵器」に於て、自ら語るところに據れば氏はアメリカより英國に渡り、英國の外國行信書點檢係として、自ら他人の信書を點檢しつゝ、而も自らは英國の情勢を之によりて蒐集判斷し、獨逸本國向けの通信は易々と之を發送して居つた。

大戰後日本に對する列强の思想戰

世界大戰に於て獨逸を覆へした列强の力は、洋の東西から急速に日本に指向せられて來た。世界の最大マーケット極東大陸を檜舞臺として、太平洋時代に活躍する爲め極東の墻壁たる日本は、先づ列强から槍玉に擧げられるの運命に陷つた。

世界大戰末期より大戰後にかけて、英國はルーター電報を以て旺んにデモクラシー思

アジア歴史資料センター

想を全世界に頒布した。この思想は急速に亞米利加を經由し、忽ちの中に洋の東西から日本に侵入し、其の宣傳は力强く日本の學界、言論界に影響して、日本の有名な學者達はこの思想攻擊の前に躍らせられ、所謂文化組合と云ふものが出來、お茶の水附近に文化アパートが建設されて、世に謂ふ文化運動なるものが擡頭した。デモクラシー、サボタージュ、普選論等所謂文化の名に於て目眩しく日本の言論界、思想界を縱橫に蹂躙し、純眞なる國家主義、眞の平和主義、之に立脚する國防、軍備等は相次いで之等似而非なる文化――デモクラシー思想――の名の下にたぢ〳〵と追ひつめられてしまつた。日本は明確に思想戰上の敗者となるかの觀を呈して來た。

此の日本に對する思想戰工作が其の最大の效果を發揮して、日本の上下は殆んど骨拔きとなつた樣に見えた時、英米は敏くもこの效果を利用して政略攻擊の手を向けて來た。かくして、ワシントン條約、ロンドン條約に於ける海軍比率の慘敗を見るに至り、又日本自體の手に依つて、陸軍軍備の大整理を實施するの止むなきに立ち至つた。

0881

アジア歴史資料センター

0882

日本の兩腕――陸海軍武力――を削り落した列强は、多年其の傳統した所の極東政策を續けて來たので、其の結果支那を驅りて日本に對して、排日の氣勢を擧げさせた。或は二十一箇條の破棄要求、旅大回收の叫びとなり、又は日貨排斥の猛運動となり、政略的にも經濟的にも、支那は明確に日本に對し敵對行動をとり始めた。其の極まる所、遂に兩國武力の衝突となり、滿洲事變の勃發を見るに至つたのである。滿洲事變は實に列國の指向せる對日包圍攻勢の手先きで躍つた支那軍閥に對し、日本の止むなく起てる防衛戰であると謂はねばならぬ。此の間の消息を獨逸海軍大佐アルフレット・ストース氏は、其の著「日本に對する强盜遠征」に於て最も明確に評言して居る。同氏の曰く

「來らんとする大戰に於て、アメリカの帝國主義世界政策の實力は、均勢を得んが爲めに如何なる場合に於ても、英國の夫れに賴らなければならぬ。既に一九二一年ワシントンに於て英國は日英同盟を破棄することを餘儀なくせられ、而して即時にシンガポールの要塞を完成することを强いられたのである。英國の海軍力は今や米國海軍力

アジア歴史資料センター

の補助部隊となつてしまつた。」

「世界歴史の全部を通じて、ユダヤ――キリスト教民族の強壓的世界政策は、常に極東を孤立に陥るゝことを勉めて來た」。

「滿洲は此の强盜政策の攻擊と、之に對する日本の防衛との境界國土である」。

「此の强盜政策の組織は、今や全世界を其の統制下に入れ全く孤立せる日本を其の對岸支那から脅威しつゝある」。

「日本の現在は世界大戰前の獨逸に甚だ酷似して居る。其の隔離せられた境遇、其の海上貿易に對する抑壓、並に其の國内に於ける思想的傾向即ち國粹的勢力、外來勢力との妥協促進がそれである。國家生存の必要から、强い勢力と有用の人物とが生れ出やうとしては、直に押し潰されてしまふ」。

「かくして國民も國家も、世界を支配しつゝある力の本質と云ふものを見極め得ないと云ふ大なる危險が、嘗て獨逸に於けるが如く、日本にとつても生じて來た。日本ある

0883

アジア歴史資料センター

0884

が故に、強盗世界政策の指導者は、日に〳〵其の唯一の障碍たる日本を、滅却し盡さうと焦慮して居るのである。斯くして日本は、日本の直面せる大なる危險を覺知することを妨げつゝある」。

「抑〻支那民族は、其の國民的危險が眞先にかつつかるゝを感づかないで居る鈍感民族である。從つて支那は、強盗世界政策——本來たゞ支那の解體をのみ企圖する所の世界政策——の使嗾に依つて、躍り狂ひ、日本に對して排日侮日を恣にして居る。支那は先づ日本の自由を保證したる後、始めて自國の自由と安全とを獲ち得るであらう。支那は列國の強盗政策に依つては、斷じて自由を獲得し得るものではない」。

日本が上述のやうな、列强思想及政略攻擊を受けつゝあることを、意識してか、せずしてか、日本の上下多數の國民は、世界大戰末期より、滿洲事變直前にかけて、春花擅上に躍り狂うて來た。而も此の間、危險は刻々日本の身邊に詰め寄つた。ロンドン條約の際、日本の某新聞等が、米國の手先に操られたと噂されたが、事實とすれば之等は皆、

アジア歴史資料センター

思想戰に對する無反省から來た所の失態である。

藩府の論戰に現はれた國際思想戰

かくて遂に滿洲事變の勃發を見るや、ストース氏は其の著「日本に對する强盜遠征」を結んで曰はく

「極東に於ては今や世界政策者の强盜的法則に依つて、大暴風舞踏會が催され、全世界を震駭して之を焦土と化せんとしつゝある。冷酷なる滋面に依つて、この大嵐は焚きつけられた。呪はれたる極東の諸民族は、そも何れの日にか目醒めやうとはする!!!」

滿洲事變勃發後、ゼネバを中心として展開した思想政略戰に於ても、日本は美事に敗北をした。其の原因は固より多々あらうが、要するに我が國朝野が、斯かる國際折衝が、畢竟近代戰爭手段の一たる思想作戰其ものであるとの認識を缺き、恰も之を平和事業であるかの如く錯覺し、之れに對する準備配慮を缺如せるが爲めではあるまいか。

0885

アジア歴史資料センター

9880

幸にも全權幾度かの交迭に依つて、我が思想戰線は活力を見せて來た。今、松岡全權のゼネバに於ける大演說から一句を紹介ずる。曰はく

「日本は少くとも、同じ立場に置かれたる西洋列國が爲し得るだけの、忍耐を持續して來た。否、事實日本は其れ以上の辛抱を重ねて來たと信ずる。だが其の勘忍袋の緒が切れる時がやつて來た。如何に我慢强い日本人の其れを以てしても、限度なくこれを續けることは不可能である」。

「一言にして謂へば、日本は今日東亞全體を通ずる脅威に直面して居る。然も極東を救ふ爲めに、腕一本で闘つて居るのである」。

「予は茲で、よしそれが多少諸君を刺戟することゝなつても、敢て明言せざるを得ない。其れは昨年秋並に本年春ゼネバに於て、頗る無責任な、人を誤らしむる叫びがあげられ、我國民を威嚇した結果、國民の一部では聯盟規約に基く最も過酷なる制裁——即ち所謂經濟封鎖をさへ受くることを覺悟するに至つた。」

アジア歴史資料センター

0887

「予は敢て云ふ。今日日本國民には制裁何時でも御座んなれの覺悟が出來てゐるのですぞ!!」

現下國際折衝は一の近代的戰爭手段たる思想政略戰であるのだ。そは斷じて平和的國際儀禮ではない。之に勝つの要は一に腹力にありと謂はねばならぬ。

松岡全權最後の奮鬪によつて、辛くも此の思想政略戰に結末をつけることの出來たのは、眞に國家の幸事である。聯盟脫退の最後の瞬間に至るまで、日本の內地では軟論續出して危くも一敗地に塗れる筈であつた。之も思想政略戰上の腹力の問題である。此の間の消息は國民の既に熟知する所であるから之を省略する。

最近に於ける日本に對する思想戰

ロシヤが多年日本に對して、赤化の魔手を向けたことは世人周知のことである。其の對日赤化工作は、今日に於ても尙ほ繼續して居るものと見なければならぬ。舊駐日ソヴイエート大使ベセドフスキー氏が其の著「テルミドール途上に在る蘇聯邦」に於て述べる

アジア歴史資料センター

8880

所に見るも、濱松の樂器爭議等に對して、露國大使館員の手を經て二萬ドル內外の資金が支出せられたことや、京城駐箚露國官憲が不逞鮮人を操縱し劃策して居つたこと等は、動かすべからざる事實である。我が國家組織を崩壞せしめ、一朝有事の際、祖國敗戰主義を以て國內を攪亂せしむべく、日本に對して赤化の魔の手が今も伸びつゝあることは、ロシヤに於ける第三インターの指令に見るも明かであると謂はなければならぬ。近頃の新聞紙の報道によるも、ロシヤが米支兩國と提携して排日運動の强化を企圖してをる模樣であり、殊に南京五十キロ無電臺と呼應して、ハバロフスク無電臺より强烈な反日宣傳を全世界に放送する外、滿洲國內の攪亂を計るとのことで、現にロシヤは、ハバロフスク並に歐露の無線臺より各種排日放送を實施しつゝあるのみならず、南京無電臺も大いに排日的放送に忙しいやうである。又、最近の情況として、支那の大半が殆んど赤化し盡され、共匪が橫暴を恣にして居ることは、對岸日本にとつて、思想國防の上から誠に危險な話である。

アジア歴史資料センター

ロシヤ以外の歐洲某強國等も、近來日本に對して意識的に明確に敵對行動を始めて來た。例へば米國で出版された有名な小說「日米戰爭」は、某強國がヴァイツオーター氏をして、特別に書かしたものであり、又米國の新聞二千の中約七百の新聞社には、歐洲某國の記者が活躍して日米の間を離間し、日本を中傷する如く策動して居るとの事である。例へば昨年十月頃突如として日本がメキシコ西北岸地方を買收するとの說がアメリカに流布されて、甚しく米國人間の神經を尖らしたことがあつた如きそれである。

其の他一般に近時、日本を孤立せしむる目的を以て日本と列强との間を割く爲めに各種の思想政略工作が實施せられて居ると見える節が多い。「歐洲は結束して黃禍に備へなければならぬ」とか、「日米、日英、日露の衝突は必然的なものである」とか、「世界の平和は今や極東滿蒙の一角に於て日本が之を攪亂しやうとしつゝ、其の口火をつけつゝあるとか」かう云つたやうな論法をとつて日本を中傷し日本を孤立に陷れつゝ、列强自らは、夫々自己の國際的立場を有利に展開せんとしつゝあるのである。

アジア歴史資料センター

更に著目すべき事柄は、日本内部に於ける國論の統一を阻害しつゝ、巧みに日本の興國的氣勢を抑制しつゝ、再び日本をして昔日の如き軟化退嬰に導かんとする思想戰工作が、早くも其の芽を出しかけて來たことで、來る海軍條約改訂問題、聯盟脱退效力發生期に於ける委任統治諸島の管理問題、並に今後に於ける滿蒙問題等とからんで、列强の思想政略攻擊戰線が、日本の言論界や政界や財界其他一般國民殊に左翼陣營などに、如何に其の魔の手を張つて來るかと云ふことは、今より國民の大いに刮目して視るべき面白い問題であると思ふ。

思想戰に對する國民の用意

平時戰時を通じて、近代國防を完了する爲には、國家は一定の方針に基き、統制ある思想戰線を張つて、敵對國に對して必勝を期せなければならぬ。從つて思想戰に處する機關の整備及之が運用等に關し更に〳〵研究を要するものがあると思はれるのであるが、國民としては、敵對國の思想攻擊に對して、充分なる覺悟と警戒とを以て之に敗れ

アジア歴史資料センター

ないだけの用意が必要である。最近に於て日本の國内勢力を數派に離間分斷し、其の擧國一致を妨げ、非常時解消の名の許に、新興日本の擧國的氣勢を挫き、我が大陸政策を根柢より覆へさうとする列强極東政策者の魔の手が、日本の國内に再び伸びて來たやうであることは、前述の如くである。萬一、之等の魔の手に乘ぜられて、新興日本の氣宇を自ら削ぐやうなことがあつては、滿洲事變によつて折角獲ち得た所の自主的新日本の飛躍の第一歩を、再び覆へすことになる惧れがある。近く一九三五、六年の國防危機線を控へて、かのワシントン及倫敦條約締結當時の如き、思想戰上の慘敗を見ることは、日本の最も警戒しなければならぬ所である。眞の擧國一致は全國民が、此の列强思想攻擊の魔の手より目醒めて、日本の行くべき本然の大道を力强く認識した時、始めて獲ち得らるゝであらう。

日本は今や太平洋時代に於ける世界の聖義軸心に立つて、眞の道義を世界に恢弘する爲め、自主的に勇往しなければならぬ運命に置かれて居る。國民が此の崇高深遠なる祖

アジア歴史資料センター

0892

國の傳統的大信條を把握するとき、日本は自ら內に其の反省改善すべきはすると共に、外に對しては、初めて、近代思想戰線の勇將として、太平洋時代に雄飛することが出來るであらう。

最近到著した獨逸國防雜誌は、現下に於ける日露の關係を評論して謂へらく、「ロシヤは此の好機を失せず日本に對して斷然として立つを有利とする」と。其の理由とする所は、「ロシヤの現況は帝制ロシヤ時代にも增して有利な關係に置かれてある。戰爭の勝利はロシヤ側に在るだらう。殊に全般の兵力、飛行機、戰車、機動兵團、及毒瓦斯隊に於てロシヤは日本よりも遙かに〳〵優勢である。が、それにも增して、ロシヤの思想赤化の對日攻擊に對しては、日本は何等の對抗すべき標語を持たない極めて危險な態勢に在るんだ」と謂ふのである。果して然るや否やは辯せざるも以て內省の資となすに足らう。

混沌たる世界の現勢に於て、太平洋時代を主導する日本の思想戰の大根幹は、速に之

アジア歴史資料センター

を、洋の東西、時の古今に通じて戻らない皇道文化聖戰の上に確立しなければならぬ。一言要約して曰はく

「皇化」

即ち之である。赤露若し「赤化」を以て其のスローガンとするならば我れ亦「皇化」を以て標語とすべし。眞の人種平等四海同胞と、人類の幸福平和とを招來するの大使命と其の效用との點より見て、「世界皇化」の「世界赤化」に比べて、思想戰の大根幹として優ることは誠に萬々である。嗟惜ひらくは、皇道文化の政治的殊に經濟的內容が、世界新時代を主導する爲には尙ほ未だ大いに更生維新を要するものがあること是れである。玆に日本が速に皇道經濟を確立して以て大いに世界に呼びかけねばならぬ必要がある。

近代日本の思想國防はかくして始めて全きを得るであらう。

0893

アジア歴史資料センター